

## 「嵐ヶ丘」の語り手ネリイ・ディーンに関する一考察

丸田, 裕子

<https://doi.org/10.15017/2332812>

---

出版情報 : 文学研究. 62, pp.101-110, 1963-09-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :



# 「嵐ヶ丘」の語り手ネリイ・

## ディーンに関する一考察

丸 田 裕 子

エミリ・ブロンテの小説「嵐ヶ丘」は、嵐ヶ丘と呼ばれる旧家の娘キャサリンと、孤児ヒースクリフの、現実にあつては稔る事ない、激しい愛の物語を骨子としている。作者は、この恋愛物語を、都会から北英の田舎に、陰遁の為やつて来た、ロックウッドという紳士が、家政婦ネリイ・ディーンに、思ひ出話として語ってもらうという形で展開している。

私は以下このような物語の語り口を、物語自体の思想内容との、内面的関連から眺めてみたいと思い、特に語り手ネリイ・ディーンについて考察してみようと思う。最初に断わっておくが、ネリイ・ディーンなる人物は、この物語の殆んど大部分を語ってくれる存在であるから、彼女について考えると、当然小説の技法という問題が絡まってくるけれども、小論ではこの点には触れない事にする。小説の語り口が、その小説の内容そのものだけから、説明しきれないわけではないという事は、云うまでもないが、私がこのような事を試みるのは、一つには、これまでに、ネリイ・ディーンが存在が、あまりにもエミリ・ブロンテの、物語作者としての技能という事で、説明され過ぎたような気がするからである。

ネリイ・ディーンについて考える前に、先ず彼女が語る物語の主要な部分、即ちキャサリンとヒースクリフの恋愛、及びヒースクリフの復讐と死の持つ意味を、ふりかえってみよう。キャサリンとヒースクリフの恋愛には、奇妙に性的な要素が無い。又その成立も、普通の恋愛のそれとは異っている。彼等は突然にキュービットの矢に当って、互いを認め合うのではない。「私はヒースクリフなのよ」（第九章）というキャサリンの言葉通りに、彼等は互いに他を、自分自身の存在そのものとも感じ合っている。その感情は、この二人が、

まるで野生の動物のように、自然の中を馳けまわって遊んだ日々、深く根ざしている。ジョウゼフの説教も、兄ヒンドリの暴虐も、自由な荒野でのよろこびや、二人だけの子供らしい語らいがあればこそ、問題にもならなかったのである。ネリイが云う通り、「副牧師が、お仕置きに、キャサリンにどれ程沢山の章句の暗記を課そうとも、又ジョウゼフが、腕が痛くなるまでヒースクリフをひっぱたこうとも」(第六章)二人は一語にさえなれば、何もかもけろりと忘れてしまうのであった。

二人の子供が、このようにして大人になっていったという事、否、もっと正確に云えば、大人になる事を拒み続けたと云う事は、二人の情熱を解く鍵である。二人の恋は、云わば、永遠に帰る事のない子供の日への、強烈な憧れである。高熱に悩むキャサリンの、「おお、私燃えるようだわ。外に出ていたい。私はもう一度半ば野蛮で、大胆、自由な子供に帰って、ひどい目に合わされても、気違いみたいにならず、かえって笑いかえしてやりたい」(第十二章)という絶叫や、子供の日のヒースクリフへの言及は、明らかにこの事を証明している。彼等の情熱は、子供時代に見られる、原初的で、本能的な人間精神の、限らない讃美なのである。

子供の日への郷愁は、おそらくどんな大人でも胸に抱くものであろうが、しかし子供はやがて、長ずるに従い、道徳や、社会の規範が、自分を抑圧する敵ではなくて、それなくしては、自分も他人も、共に支障なく生存し続ける事が、不可能であるという事を学びとるものである。この点で彼等二人が、自己中心的で、自分を抑える事を知らぬヒンドリの許で育ったのは、致命的な事であった。ヒンドリによつて意味されている現実、二人にとっては、まさに悲惨と苦悩として受け入れられたのである。そしてこの意識が、彼等をして更に激しく、子供の日に憧れさせたのである。

こういう諸事情からもわかる通りに、二人が形作っている世界は、明らかに一般の社会から孤立するものである。リントン家が代表する紳士階級の社会がやがて、二人の前に現われる。それは、正常で、理性的であり、社会の規範にそつた人々である。キャサリンは、上流社会のはなやかさに欺かれて、我知らずその仲間入りをするが、彼女は決してその社会の掟に、心から服従したわけではなかった。ヒースクリフが彼女にとつて意味している、あの世界の空気を呼吸する事なしには、生きてゆけない事を知り乍ら、彼女はエドガー・リントンとの婚約を承諾するが、それは、彼女の言葉を借りれば、「今となつては、ヒースクリフと結婚する事は、身の墮落である」(第九章)からであった。しかしそういう自分自身が、見方を変えれば、墮落している事を、彼女は自覚していないのである。エドガーとの結婚は、彼女の肉体と魂の分裂を意味した。夫以外の男を愛してはならぬという掟は、彼女に生命の根源を絶つ事を要求するものであった。

し、又一方ヒースクリフの彼女に対する愛は、誇り高いリントン家の夫人として生きる事を拒むものであつた。彼女にはもはや、死を願望する事しか許されていなかったのである。

一方ヒースクリフは心變りして自分を裏切つた女を恨みはするが、しかし彼は自分の本当の敵を知つてゐた。復讐がキャサリンに対してではなく、彼から彼女をうばつた者達に向けられるのは、彼自身と彼等とが、根本的に異質であり、如何に心變りをしようとも、キャサリンは自分と同じ魂を持つてゐる事を確信してゐたからであつた。彼は、キャサリンを殺した者達として彼等を見るのである。幼い日のままの愛情を心から消し得ず死んでゆくキャサリンも、死んだ恋人を忘れ得ず、復讐の念に燃え、彼女の幻を追つて生きるヒースクリフも、彼等自身の価値観に従えば、非常に貞節なのである。しかしそれは、云うまでもなく一般の社会の道德とは、真向から対立するものであり、惡の名で呼ばれるのである。

以上述べたように、キャサリンとヒースクリフの戀愛は、理性の世界に対する、情熱の荒々しい反抗であつた。その情熱と理性の激しい相剋の渦の中に巻きこまれて、キャサリンが死に、そして十八年後、怖しい復讐の後にヒースクリフが死んだ時に、二人の反抗は空に歸したのであるうか。勿論地上には再び平和がよみがえり、明るい未来が約束されてはゐる。しかし注意すべきは、彼等の死は敗北を意味するものではなく、まさに勝利として、かちとられている事である。瀕死のキャサリンが怖れるのは死によつて惹起される別離ではない。

「貴方は私を忘れてしまふかしら？ 私が生の中にはいつた時、貴方は幸福になつて？ 二十年もたてば、貴方は云う？ あれがキャサリン・アーンショウの墓だ。俺はずっと昔彼女を愛した事があつた。そして彼女が死んだ時にはとても悲しかったものだ。しかしそれも、もう昔の事。それ以後俺は多くの者を愛した。俺の子供達は、彼女よりも、俺にとつて大切だ。死ぬ時に俺は、彼女の傍に行ける事よりも、彼等を後に残してゆく事を悲しむだらうつて。ねえ、そう云つて？ ヒースクリフ。」（第十五章）

この言葉にも見られる通り、死に於ける忘却こそが、彼等の怖れなのである。この想いが、

「私は、貴方に、自分以上の苦しみを与えたいとは思わないわ、ヒースクリフ。ただ私は、二人が決して、別れ別れにならないようにと願うの。私の云つた言葉が、以後貴方を苦しめるなら、同じ苦しみを、私も地下で味わつてゐるのだと思つて頂戴。」（第十五章）

と云う言葉や、

「キャサリン・アーンショウよ、俺が生きている間は、お前も安らかに浮ばれないように！」（第十六章）

というヒースクリフの祈りとなるのである。すでにこの作品の半ば、キャサリンの死を契機として、死が新たな生へと転換する可能性が提起されている。キャサリンの死後、十八年間、ヒースクリフの心は、この可能性をめぐって、やすまるひまもなく戦い続けたのであった。キャサリンの幽霊は、彼にとつては、死が新しい生へと転換する確かな約束のしるしとして、受け取られている。ロックウッドが、嵐ヶ丘に一夜の客となり、夢に見たキャサリンの幽霊に、ヒースクリフが、あれ程までに激しい反応を示すのは、その故である。永い復讐が完成に近づいた時に、ヒースクリフには、彼自身の言葉によれば、「変化」が訪れるのであるが、その「変化」こそは、彼が死を通して、永遠の生を獲得する事の、疑うかたない確信である。彼は不思議な恍惚死を経て、キャサリンと霊的な合体を成就するのである。あたかも、二人の悲劇は、結局各々が異った肉体を有していた事による、とても結論するかのよう。彼等の恋愛が、性的要素を欠いているという印象を、読者に与えるのは、この理由はよくとも云えよう。

ヒースクリフとキャサリンの恋愛の、意味する究極のものは、以上見て来たように、情熱の、神祕な領域への参入なのである。そして彼等の情熱は、元来純粹、無垢なものであり乍ら、又、悪しく、忌むしいものでもあった。

しかし、それが単に悪として提示されるにとどまらず、善悪の規準を超えた、宗教的次元に到達しているのである。それは、情熱の自律性の、強力な主張である。

さて、このような内容を持つ物語りを、語り聞かせるのが、ネリイ・ディーンである。

「膝の上に握りこぶしを置き、あから顔に冥想のかげりを浮かばせて、暫く考えこんだ後、彼女は云った。「ああ、あれから世の中は、大分変りました。」（第四章）

最初に、このように描き出される彼女は、誰でもまず気付くように、誠実な人物であり、常識的で、又かなりに教訓的なところもある田舎婦人である。当然考えられる事ながら、彼女はキャサリンや、ヒースクリフを非難し、時には、キャサリンに対して、裏切り行為に出る事もあった。そういう時の彼女は、正しくはあるが、非常に心が広い、とは云えない。確かに彼女は、「膝の上に握りこぶしを置い

た、あから顔の」田舎女なのである。

異常に激しい情熱の物語りと、常識的な語り手という組み合わせについては、殆んど一致した見方がある。つまり、エミリ・ブロンテは、常識という拮抗力を語り手として提示する事によって、語られているすさまじい激情の物語「嵐ヶ丘」に、偉大な作品のみが持ち得る、稀なる資質を与える事に成功している、という意見である。確かにその通りであって、ネリイは、キャサリンとヒースクリフの物語が最高潮に達する時には、常にそのアンチテーゼとして提示されている。例えば、この物語りで、最初のやま場とも云うべき、キャサリンの告白の場面（第九章）に於いてもそうである。「たとえ他のすべてのものが消滅しても、彼さえ残っていれば、私は依然として生き続けるでしょうよ。ほかのものが残っていても、彼がいなくなれば、この宇宙は私にとつて、巨大な、赤の他人みたいなものになるでしょう、」というキャサリンの、切々たる内心の暴露に対して、「彼女の馬鹿々々しさ加減には、辛棒がなりませんでした、」というのがネリイの感想なのである。

その他、このような例は、数えあげれば限りが無い。

しかし乍らネリイが表わしている常識と、キャサリン、ヒースクリフの情熱との対比から、ネリイを彼等に対立する力としてのみ見るのは、誤解を生じやすいのではないかと、私には思われる。ネリイは、時に筋の展開にかかわるような行動をすべく描かれる事はあつても、やはりこの物語の中で恋人達の情熱の世界に対抗するように意図されているのは、エドガー・リントンである。

長い、うす色の髪が、こめかみのあたりで軽くうねり、眼は大きくて、真面目で風采はあんまり優雅すぎる位だ……（第八章）

エドガー・リントンの肖像画を見せてもらつて、ロックウッドはこのように思う。善意という点では、ネリイに遙かにまさり、教養が深く、上品で、信仰心に富んだ彼は、我儘なキャサリンに対して、優しすぎる程に情愛深い夫として描かれている。しかし「概してあの方には、生氣がありませんでした」（第八章）、とネリイが語るように、力強さという点では、ヒースクリフに劣る。キャサリンに対する愛について、より大きな自信を抱いているのは、夫であるエドガーではなく、ヒースクリフであり、エドガーは、彼に対して、積極的に憎悪するよりは、根強い怖れを抱いて、キャサリンの死後生きてゆくのである。

この物語を、ネリイの口から聞いてゆくうちに、我々はネリイについて、次のような事に気付く。即ち、彼女は、ヒースクリフが表わす、情熱の世界を、怖しい、忌わしいものと眺めるが、一方、ヒースクリフと対立するエドガーを、非常にすぐれた美質を備えた紳士で

はあるが、ヒースクリフに較べると、迫力がないと観じているのである。二人の男を比較して、彼女は語っている。

今、炉の明りと、ろうそくの火で、すっかり照らし出されてみますと、ヒースクリフの変りように、今更のように驚いてしまいました。彼は背の高い、強そうな、逞しい男になっていて、彼の傍に立つと、私の主人は細くて、子供のように見えました。真直な姿勢は軍隊にいたのかと思わせました。彼の顔附がリントン様より老けて見えるのは、表情や、眼鼻立ちが凜としていたせいです。(第十章)

ネリイは、物語の人物達を、道徳性と、力との二重の規準によつてはかっているのである。勿論このような、二通りの評価が、同じような方法で作品の中に表明されているのではない。力の強弱の評価は、先に挙げた例でもわかるように、殆んど大部分、描写そのものの中に見出されるが、道徳的な評価は、彼女自身の見解、或いは批判として表明され、それらは作中刻所に見出されるのである。つまり、云つてみれば、力の強弱の評価よりも、道徳的な評価の方が、ネリイ自身にとつて、より意識的になされているのである。先に、ネリイがまず第一番に、情熱の世界に対抗する、常識的、實際的要素として、一般に認められている、と述べたが、このような事情を考えれば、それは至極当然な事である。

しかし彼女は、力の優劣をあまりなく伝える語り手であり、更に興味深い事には、恋人達がいっていった神秘な情熱の世界に、深い洞察と共感を抱いているのである。田舎女らしい赤ら顔の上の、「冥想のかげり」は、深い意味を持つて来るのである。驚くべき事ではあるが、彼女はある意味で、より純粹なヒースクリフその人、とでも呼びたいような面を、時に我々に見せるのである。ヒースクリフは、彼の情熱の無限の対象として、キャサリンと云う、具体的な存在を持つていたが、ネリイは、彼と同じような心性を見せる事があり、ただ彼に較べると、彼女の憧憬の対象はもっと抽象的で、或る意味では、もっと哲学的なのである。彼女のこのような傾向が顕著であるのは、「死」に対する態度に於いてである。キャサリンの死を回想して、彼女は次のように述懐する。

私だけに特別の事かも知れませんが、死人の部屋で通夜をする時は大いに幸福です。気狂みたひになつたり、絶望して泣き悲しむ人と一諸に、そのおつとめをする時は別ですけれども。この世も、地獄も乱し得ないような安息を見、無限の、くもりない来世を確信いたします。死んだ人達のはいつていつた永遠の世界、そこでは、生命は限りなく続き、愛は限りなく共感を得、よろこびは永久に充ち溢れます。リントン様がキャサリンの祝福された死をあまり嘆かれますので、あの方の愛情にすら、多分の利己心があるのだという事

を、その時気づきました。(第十六章)

この「死」の讚美が意味するものは何であらうか。ネリイは、死を「永遠の世界」と呼ぶ。それは善き人の、死後の世界での平安を意味しているのではない。「死」は善悪の支配しない世界として、「生」と対比して、受けとめられているのである。それは、「生」とは較べものにならぬ、高い世界である。彼女の言葉には、善悪をこの世に於ける枷とも見、それに反抗してやまぬ、生命力、ないしは情熱の主張が見られるのではなからうか。尤も彼女のこの言葉には、ヒースクリフのように、実際に、この世に於ける障害と、積極的に戦おうという意志はない。ここに表明されているのは、云わば、ヒースクリフから、復讐という要素を引いてしまったような思想のように思われる。先に、彼女が、より純粹なヒースクリフとも云うべき資質を持っている、と云ったのは、このような意味に於いてである。

作品全体を通してみると、ネリイのこのような一面は、彼女の常識性、實際性に比較すると、勿論遙かに目立たない。しかし、一方にこのような資質を持つ事によつて、彼女が描いてみせるキャサリンや、ヒースクリフは生き生きとした存在となるのである。そして又、その故に彼女が見せる、自然の寸描が、心にくいまでに、この物語の雰囲気、ぴったりと一致しているのである。

「嵐ヶ丘」に關しての、様々な見解を、以上述べた、語り手ネリイ・ディーンの二重性格とも云うべき特質を考慮に入れて、ふりかえつて見ると、甚だ興味深く思われる事がある。

非常に大ざっぱな見方ではあるが、この小説の内容が、圧倒的に陰慘、かつ邪惡であり、善を描き出す力が足りない、という意見は、<sup>(註1)</sup>作者が、語り手ネリイに、繰り返して、ヒースクリフやキャサリンの非をならさせ、エドガーをその善意の故に称讃させようとも、そのような道德面での評価は、力の評価の強烈さに、くつがえされ、結果として、善が強きものとして、描かれていない、という事を不満としたものであらう。

当然、このような見方には反動がある。善惡の規準に縛られる事なく、この恋物語の持つ強力なエネルギーを称讃する人々である。<sup>(註2)</sup>

以上の二つの見解に比較すると、セシル卿は非常に面白い見方をしている。<sup>(註3)</sup>彼は道德的評価にとらわれる事も、力の評価にとらわれる事をも、努めて警戒しているように見える。彼は、強いけれども悪しきものと、善ではあるが弱いものを、各々、「嵐の要素」、「静寂の要素」という名で置き換え、その間に一種の均衡を見出すのである。そしてそれぞれの要素は、宇宙に充滿する、一つの精気の、異つ

た様相を示すに過ぎず、この二つは、明らかに対立するものではあるが、葛藤するものではなく、人の眼には、如何にそれらの間に、不和、葛藤があるように見えても、遂には又均衡に帰るものである、と述べている。そしてこのような宇宙観こそが、エミリ・ブロンテのものであり、彼女はいみじくもそれをこの小説の中に具現化しているのである、と説いている。

果して、そうであろうか。セシル卿の見解は、既存の概念に出来る丈縛られずに、「嵐ヶ丘」を見ようとする点で、意義深く思われるが、強き惡と、弱き善を、直ちに、「嵐の要素」や「静寂の要素」に置き換える事が、妥当であろうか。むしろ、この物語の中には、善惡の物指と、力の強弱の物指が、平行して存在している、と見る方が素直な読み方ではなからうか。

「嵐ヶ丘」の解明に、大きな手がかりを与えているのは、同じ作者が残した、二百足らずの詩である。<sup>(註4)</sup> 彼女の個々の詩について、一つ一つ例証する事は、この小論では行えないので、以下ごく、かいつまんで述べる事にするが、彼女の詩全体の中心をなすのは、復讐という要素を引いてしまったヒースクリフの思想、とても云うべきものである。即ち現世を苦悩の世界と見、想像力の高い飛翔によって、「死」の中に新たな、永遠の生を見出すエミリ・ブロンテの、神祕的な直観によって、彼女の詩は息づいているのである。スウィンバーンは、「嵐ヶ丘」の傑出したくたれを書く力は、人間同胞に対する愛よりも、母なる大地への愛着の強い人間でなければ有し得ない、と述べているが、エミリ・ブロンテをして、この世を苦悩の世界とも、墓場とも感じさせ、「死」の中に彼女の「天国」の達成を夢見させているのは、まさにこの、母なる大地への愛着であり、又人間の本能的な生命力への、限らない讃美なのである。

この想像力によって達成された、彼女の「天国」は、しかし理性が支配する現実の世界とは、相容れないものである。そして彼女の詩の幾つかには、この想像力と、理性の齟齬に心悩ます詩人の胸の中が語られているように、私には思われるのである。事実、彼女は、「理性が幾度か、自然の悲しい現実を嘆き、真実が、新たに開いた空想の花を、無残にも踏みにじる」のを嘆いたのである。<sup>(註5)</sup> そして、このように理性の光に照らされる時、彼女の「天国」は、又「地獄」とも観じられているのである。

おお死よ来たれ。力と意志とが

そのむごたらしい戦いを終り、

征服された善と、勝ちほこれる惡が

一のいこいにつくように。<sup>(註6)</sup>

や、

私の魂は天使の歌と悪魔の呻きを

あわせ飲んだ。

この胸に秘められたものを、

胸の中の奥深く、魂のみが告げるであらう。<sup>(註8)</sup>

の詩句に見出されるように。

エミリ・ブロンテは、想像力によって「死」の彼方に光輝ある永遠の世界を創り上げると共に、そのような世界が真であるのか、虚偽であるか、又そのような世界を創り上げ、そしてそれを信じる事が、善であるのか、悪であるのかという、生命をすり減らすような疑問の中に、常に動揺していたように思われるのである。「嵐ヶ丘」で、ヒースクリフや、キャサリンの情熱に、生命を与えているのは、エミリ・ブロンテの、このような激しい想像力であらう。そして、その物語を語り聞かせるネリイ・ディーンは、エミリ・ブロンテがゆきついた内奥の世界が、善であるのか、悪であるのか、という動揺から生み出されたのではなからうか。ネリイ・ディーンは、この矛盾に解答を与える人物ではなく、矛盾の中であって、様々に振動する人物なのである。云わば彼女は、語ってはならない話、しかし語らずにはおれない話をすべく、設定された人物ではないであらうか。ヒースクリフに、異常な程の興味を抱いたロックウッドが、彼女に思いついた話を懇望するという書き出しが、そのあたりから説明されるのではなからうか、とも思われるのである。

兎もあれ、作者自身の矛盾の具現とも見るべき、このネリイ・ディーンが、死んだキャサリンの胸のかたみ入れに、エドガーの金髪と、ヒースクリフの剛い黒い毛を、よじり合わせて入れてやる時のみは、この矛盾を高く超越し、統合する境地をいみじくも象徴しているが、それは若くて世を去った、エミリ・ブロンテの、遂に到達する事の出来なかつた境地ではなからうか。そしてこの矛盾は矛盾のままにこの小説を読む者の胸に、いつまでも深い疑問を残すのである。

(註1) それは、「嵐ヶ丘」出版当時の殆んどすべての人達の意見であつた。今日それに幾分近い見解を持っているのは、D. Stanford であらう。尤も彼はヒースクリフを単なるメロドラマティックな悪漢としか見なさないが、エドガー・リントンの如き道徳的人

物を描く力が、この作品に欠けているのを遺憾としている。

(註2) 例えば Swinburne がそうである。ノランズでは Georges Bataille のエミリー・フロンテナ評がその系列に挙げられよう。

(註3) Lord David Cecil: *Early Victorian Novelists* (London 1948) Emily Brontë and *Wuthering Heights*

(註4) 拙稿「嵐ヶ丘」―価値と反価値の均衡について―(九月大学大学院英語英文学研究会「ケアン」第三号所載)に於いては、主としてフロンテナの詩の分析から「嵐ヶ丘」に於ける二つの価値観の並存について考察した。

(註5) *The Complete Works of A. C. Swinburne* (New York 1926) Prose works Vol. IV Emily Brontë

(註6) Ed. by C. Hatfield: *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (Oxford 1961) 174

(註7) Ibid. 181

(註8) Ibid 168

#### 関係ある主要書目

Emily Brontë *Wuthering Heights* (Oxford 1961)

Ed. by C. Hatfield: *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (Oxford 1961)

M. Spark & D. Stanford: *Emily Brontë* (Peter Owen 1963)

Lord David Cecil: *Early Victorian Novelists* (London 1948)

*The Complete Works of A. C. Swinburne* (New York 1926) Prose Works Vol. IV Emily Brontë

シヨルジュ・バタイユ著山本功訳「文学と悪」(紀伊国屋書店一九五九)